

明治末から大正期における新しい衣服の手入れ・洗濯方法

－日本女子大学校における実践例を中心に

青葉学園短大 大久保春乃

目的 明治末から大正期の衣生活は、洋装化へと向かう変化の時期であった。衣服の素材や形態の変化に伴う新しい手入れ方法を知することは、家政を預かる女性にとって重要な課題であり、それらの情報を提供したのが、教育家、医師、及び婦人団体であった。衛生論や新しい洗濯方法は各種の機関で研究され、女学生や家庭婦人を対象に広められた。本論ではこれらの研究機関の1つとして明治34年に創立した日本女子大学校の活動に着目し、当時の衣生活の向上において女子教育機関の担っていた役割を明らかにするものである。

方法 同校の資料として、明治37年に発足した同窓会組織、桜楓会の機関誌である「家庭週報」及び同会内に設けられた通信教育会が明治42年から発行した「女子大学講義」を用いた。さらに当時の婦人雑誌と、家政に関する実用書を資料とした他、一般の家庭における衣服管理の実態を把握するため、小説の記述、風俗画、写真を参考とした。

結果 明治末年には、衛生観念が浸透しつつあり、石鹸の普及が進んでいる。洋服洗濯の必要から出現した西洋洗濯屋が増加し、明治40年には日本初のドライクリーニング工場が開設された。そうした中で日本女子大学校の桜楓会では、在學生、卒業生、教員が一丸となって実践的な研究が進められていた。特徴としては(1)新しい衣服の手入れ方法が、衣服材料と薬品の作用といった化学的な観点から解き明かされたこと(2)家庭でできる西洋洗濯法や下着の清潔保持など、あくまでも当時の衣生活に即した無理のない衣服管理が提唱されたこと(3)一般には、大正年間に入ってから実用書による西洋洗濯の紹介が盛んになるが、それらの先駆的役割を果たしていたこと、があげられる。